

海を詠う

岩井圭也

第三話

第二章 昆虫

四方八方から、火矢ひやで射られているような暑さだった。

北海道の夏も暑かったが、日の光が差ししてくるのは一方向だった。しかし東京の夏は違う。いかにも堅牢けんろうそうな建物や、滑らかな舗装ほそう路から日光が照り返してくる。そのせいで、上下左右から熱線ねつせんが襲おそいかかっていた。

たまらず、わたしは板塀いたべいの影に逃げこんだ。よそゆきの紹縮緬ろちりめんの裾は汗に濡れ、ふくらはぎに張り付いている。手巾しゆきんで額や腕の汗を拭うと、水に浸したようになった。つくったばかりの黒縁の眼鏡が、鼻からずり落ちそうになる。

目の前には、牛込区うしごめ若松町わかまつちやうの住宅が建ち並んでいる。二階建ての木造住宅が多く、庭には柿かきや蜜柑みかんの木が植わっていた。余市よいちではまずお目にかかれない樹種である。海の気配は感じられない。海鳴り

も潮の香りもしない。よそよそしい顔をした家々が、どこまでも続いていた。

ほんのひと月前まで余市にいたのが、嘘のようだった。

地図を片手にうろうろと歩き回り、ようやく目当ての住宅を発見したのは、午前十一時過ぎだった。〈百田〉と筆書きされた表札を目にして、ようやく人心地がついた。

「ごめんください」

何度か声をかけると、銀鼠ぎんねずの銘仙めいせんを着こなした女性が現れた。百田さんの奥様だろう、と見当をつけ、頭を下げる。

「川崎愛かわさちあいかといます。川崎昇のぼるの妹です」

「ああ、はいはい。暑いところすみませんねえ」

人のよさそうな笑顔が、暑熱で焼けそうな身体を癒してくれた。家のなかに入ると、肌に触れる空気がぐっと涼しくなる。軒下のきしたに吊られたすだれを見ているだけで、不思議と暑さがやわらぐ。

案内されたのは八畳の和室だった。座布団の上でしばらく待っていると、口髭くちひげを生やした男性がやってきた。歳は先ほどの女性と同じくらいと見える。

「お待ちせしました。百田です」

百田さんは、にかつと快活な笑顔を見せた。あまり聞いたことのない発音で、「面食らって、つい「こんにちは」と応じるのが一拍遅れ

た。百田さんはわたしの内心を読んだかのように「聞き取れんかった？」とあぐらをかいだ。

「いえ。すみません」

「大阪の生まれなもので、あっちのなまりが残っててね。歳は？」

「十七です」

「ぼくは三十五やから、倍も生きてることになるなあ。歳取ったわ」

ははは、と百田さんはひとりで笑っていた。

百田宗治そうじといえは、同人〈椎の木しいき〉の主宰者として知られている。

自身も大手出版社から詩集を何冊も出している詩人であり、三好達治たつじや春山行夫はるやまゆきおといった若手詩人たちの後見役のような立場を務めている。なぜ北海道の片隅にいたわたしがそんなことを知っているかというと、伊藤さんも〈椎の木〉の一員だからだ。第一詩集の『雪明りの路みち』を出版したのだから、ほかでもない百田さんの椎の木社である。

余市にいた時分、古い号を兄から譲ってもらったり、伊藤さんに借りたりしてさんざん読みこんだ。百田さんの詩は『雪明りの路』に収録された作品とどこか似ていて、伊藤さんが〈椎の木〉に加わった理由が分かる気がした。余市の家に置いてきた雑誌は、どれも皺しわだらけになっている。

百田さんのもとへ挨拶に来たのは、わたしが言い出したことでは

あったけど、兄の勧めでもあった。文学をやるなら、百田さんに面を通しておいて損はない。そう言って、わたしの訪問をあらかじめ打診してくれた。

「あのう、〈椎の木〉、ずっと愛読しています」

落ちついて話そうと思っていたのに、上ずった声が出た。「そらうれしいね」と百田さんは愉快そうに頬をゆるめる。

「話は川崎くんから聞いた。小樽おたるの高女出たんやって？」

「一応、補習科まで」

「ぼくは高等小学校しか出てへんねん。伊藤くんも小樽高商の出なんやろ。三好なんか帝大や。みんな、立派なもんやで」

どう答えていいのかわからず、うつむくしかなかった。高女を出ていることに言及されるたび、せっかかない学校を出たのに、と責められるような気分になる。余計なことを話した兄を、心のなかで少しだけ恨む。

「ちかちゃんは、詩をやるんか？」

「いえ、まだ決めてないんですが」

「そうか。せっかく北海道から出てきたんやから、詩でも短歌でも小説でも、好きにやったらええ。十七やったら、なにやっても物になるわ」

実は詩を書いています、と言いたかったけど舌が動かなかった。

わたしの書いた詩は、まだ誰にも見せていない。自分の文章が詩と呼べるのかどうかすら、心もとなかった。

「仕事は？」

「新橋の貯金局で働くことになりました」

「いまはどこに住んでるん？」

「中野町で、兄と暮らしています」

わたしは先月に上京してからというもの、兄の家に居候いせうこうしていた。
た。

兄が住む借家では、他にも北海道からやってきた文学仲間や地元の後輩が寝泊まりしている。一部の下宿人からは徴収しているようだが、基本的に賃料は兄が負担していた。わたしもその恩恵にあずかっているひとりだ。新橋の貯金局で働けることになったのも、兄の紹介のおかげだった。そのうえ兄は、わたしたち居候たちのために食品を買ってきてくれたり、本を譲ってくれたりする。兄がいなければ、東京での生活がままならないのはたしかだった。

百田さんは、次から次へと質問を繰り返した。文学の話題はほとんどなく、わたしの東京での生活や、余市にいたころの暮らしぶりについて尋ねた。手応えはまったく言っていないほどなかったけれど、なぜか百田さんは機嫌よさそうだった。

「よし。きょうはちかちゃんに来てもらったから素麺そうめんにしよ。食べ

ていったらええわ。近くの乾物屋がうまい素麺を仕入れてるんやけど、主の親戚が播州ほんしゅうにいとこで……」

おしゃべりに耳を傾けていると、時間はあつという間に過ぎていった。それから、百田さんと奥様と三人で素麺をすすった。播州でつくられた素麺は、百田さんの言った通り噛みごたえがあつて喉ごしもよかった。食後の番茶を飲みながら、百田さんは「ちかちゃんは利発やね」と感心していた。

「なにを訊いてもぱつと返ってくる。話していて気持ちいい」

「ありがとうございます」

「また来てや。用事なんかなくてもええねんから。もちろん、詩でも書けたら見せてくれたらええ。ちかちゃんの詩なら、きつと〈権の木〉に載せられる」

その言葉にはさすがに苦笑した。作品を読む前から雑誌への掲載を約束するなんて、いいかげんにもほどがある。だが百田さんはまじめな顔で「ほんまよ、ほんま」と身を乗り出した。

「文章には人が出る。ちかちゃんは、きつとええ文筆家になる」

「では書けたら、真っ先に百田さんにお見せします」

「きつとやで」

にやあ、と横に口を開いた百田さんは、口髭と相まってナマズのようだった。失礼だからとても口にはできないけど、その連想が妙

に面白くて笑ってしまった。台所から顔を覗かせた奥様が、「なにがおかしいんだか」と呆れて笑っていた。

九月になっても、東京には夏が居座っていた。

余市なら涼しい風が吹きはじめる頃合いだが、東京の日差しは研いだ針のように鋭い。夜の寝苦しさはいくらかましになったものの、それでも起きると背中にびっしりと汗をかいていた。

「どうして、こっちはこうも暑いのかな」

わたしは隣を歩く兄に向かって、文句をこぼした。兄の頭髪は、東京に来てからというものの少しずつ長くなっている。余市にいたころ短く刈っていた髪は、夏の盛りの芝くらいの長さになっていた。

「余市が寒すぎたんだ」

「そうかな。こんなに暑いところ、人が住む場所とは思えないけど」「東京の人間なら、あんなに寒くて雪が降る場所には住めない、って言うだろうな」

「揚げ足ばかり取らないで、道民なら味方してよ」

わたしたちは、伊藤さんが住む和田堀町のアパートへ向かっている。

白いワンピースのわたしと単衣の兄が並んで歩いていると、どこかちぐはぐな感じがした。それでもきょうの服装は譲れなかった。

伊藤さんと会うときは、このワンピースと決めていたのだから。

伊藤さんはつい先週、北海道から東京に戻ってきた。すでに一度会っている兄によれば、「前と変わらない」とのことだった。ただ、わたしは知っている。前触れなくわが家を訪れた伊藤さんが、血走った目で死への恐怖を吐いていたことを。

目的の木造アパートに着くころには、中野の家から三十分ほど歩いたため、兄妹そろって汗みどろになっていた。玄関のガラス戸を引き開け、履物を脱いで上がる。板敷の廊下は、一步踏み出すたびにぎしぎし鳴った。伊藤さんの個室は、薄暗い廊下をまっすぐ進んだ先、一階の角にあった。

兄が閉ざされたドアを拳で叩くと、「はい」と聞きなれた声が返ってきた。

「整^{せい}、ぼくだ。ちかをつれてきた」

数秒後、ドアが内側から開けられた。丸い眼鏡をかけた優しい顔が、向こう側からひよつこりと覗いた。あの日、青白い顔でわが家へやってきた面影はなかった。

「やあ、ちかちゃん」

「来てしまいました、東京に」

伊藤さんは満足そうにうなずき、わたしたちを室内に招じ入れてくれた。

「片付いていないから、恥ずかしいな」

伊藤さんなりの謙遜けんそんかと思ったが、実際、部屋は片付いていなかった。畳や棚には何十冊もの古書が積み上げられ、いまにも崩れそううだ。あたりには原稿用紙も散乱している。火鉢ひばちのなかの灰はひからび、とうにゴミと化していた。部屋の隅には、毛髪ほこりや埃ちりが吹き寄せられていた。今月入居したばかりだそうだが、どうすれば短期間でここまで散らかせるのだろうか。

座卓の上の花瓶に、一輪の白い花が生けられていた。その花は、くすんだ部屋のなかで唯一、生き生きとした気配を放っていた。

途端に胸のうちがざわつく。伊藤さんが、自分で花を持ってきて生けたのだろうか。これだけ部屋を散らかしている人が、わざわざ自分ひとりのために花を？ 誰かが持ってきたと考えるのが妥当ではないか。だとしたら、それはきつと女性……。

「どうだい、整。新しい詩は？」

兄は部屋の乱雑さなど意に介さないようすで、本と本の隙間すきまであぐらをかいた。わたしは座っていいのかわからず、なんとなく立ちたままでいた。伊藤さんは立ったまま古書を整理しながら、「急せかすなよ」と応じる。

「あつちから戻って一週間だぞ。そう簡単に傑作けつさくが生まれてたまるか」

「きみなら一週間あれば十分だろう」

兄の言葉は茶化し半分、本心半分に聞こえた。伊藤さんはまともに取り合わず、「ちかちゃんは？」と話題をそらした。

「東京にはなじんだ？」

「少しは。まだこっちの暑さには慣れませんけど」

「そればかりだ。ちかは昔からからだが強くないからな」

伊藤さんが「ちかちゃんも座って」と言ってくれたので、ようやく腰を下ろす。兄は自宅のように、後ろに手をつけてだらしなく足を開いた。

「ちかはこっちに来てから、百田さんにえらくかわいがられているんだ」

「へえ。〈椎の木〉に入るかい？」

「まあ門弟もんていというよりは、娘のような感じだね」

兄を横目でにらむ。また余計なことを。

ただ、百田さんが目をかけてくれているのは事実だった。わたしが顔を見せるたび、夫妻は食事やお菓子をこちそうしてくれる。わたしはなにかお返しをするでもなく、百田さんが披露する話にころころ笑っているだけだった。あんまり居心地がいいので、九月に入ってからもう三度も家に行っている。

「なんにせよ、百田さんと近づきになるのは悪くない。うまくいけ

ば、いろいろと人を紹介してもらえるかもしれないよ。あの人は顔が広いからね」

伊藤さんは兄をたしなめるように言ったが、その言葉にも思わず眉根が寄った。わたしはそんな目論見のために、百田さんの家に通っているのではない。むしろ伊藤さんや兄は、常に打算で人と付き合い合っているのだろうか？ 東京では、そういう人付き合いが普通なのだろうか？

「昇。ちかちゃんにはまだ、例の件は話していないのか」

「例の件？」

「ほら。新雑誌の」

ああ、と兄が高い声を出した。新しい雑誌をつくろうとしている話は、五月に伊藤さんから聞いていた。

「まだ先のことだから」

「あと半年だろう。ちょうどいいから、ここで話したらどうだ」

兄が横目でこちらを見たが、わたしはあえて黙っていた。じき、気まずさに耐えかねて兄が口を割るだろうと踏んでいたからだ。案の定、兄は「隠していたわけではないんだけど」と言い訳をしてから切り出した。

「来年の春、ぼくらで文芸誌を創刊する計画がある」

少しだけ意地悪な気持ちで、「そうなのねえ」と初めて聞いたよう

な反応をしてみせる。兄はこわばりをほぐすように咳ばらいをした。「もし興味があるなら、だが……ちかも編集助手として入るかい？」
「いいの？」

知らず、両手を組み合わせていた。思いがけず、早々と文学に近づく好機が巡ってきた。東京に來た甲斐があるというものだ。

「やらせて。なにをすればいい？」

「焦るなよ。本格的に動くのはこれからだから」

兄の横から、腕を組んだ伊藤さんが「会計の人手が足りなくてね」と割って入った。会計、と聞いて思わず口がへ字になる。

「わたし、数学は大の苦手なんです」

「大丈夫。簡単な計算ができれば十分だから、心配はいらないよ。それに……」

伊藤さんの目にはたくらみの色があつた。さらに頼みごとがあるのだろうか。

「まだ、なにか？」

「ちかちゃんは英語が得意だろ。だから翻訳をまかせたいんだ」

思いもよらない提案だった。たしかに高女では英語を学んだ。けれど、それを文学に活かせるとは思っていなかった。戸惑いで言葉を発せないわたしを尻目に、伊藤さんはひとりで話を進める。

「翻訳というのはとても創造的な営いしなみなんだよ。ただ辞書を引いて、

日本語を当てはめればいいってものではない。きちんと原文の意図が再現できるよう、表現を作り直さないといけない。新しい作品をつくるのと苦勞の度合いは一緒だよ」

わたしには、いいとも悪いとも答えようがなかった。学校の外で英文の翻訳なんてしたことがなかったし、伊藤さんの言うような高度な営みができるとも思えなかった。兄は腕を組み、両^{りょうまつ}脛を閉じている。この件に関しては傍觀を決めこむつもりなのか、口は固く閉ざされていた。

「心配はいらない」と、伊藤さんはさっきと同じ台詞を繰り返した。「翻訳の要諦はぼくが一から教える。原文もぼくが選ぶ。ちかちゃん^{ちゃん}は、ぼくが指示した通りに訳してくれればいい」

どう受け取っていいかわからず、はあ、と力ない返事が口から漏れた。

伊藤さんが翻訳を個人教授してくれるというのは、願ってもない申し出だった。ほかならぬ伊藤さんから、じかに文学の手ほどきを受けられるなんて夢のようだ。こちらから謝礼を払ってでも、お願いをしたいくらいだった。

ただ、引つかかる点もあった。伊藤さんは、翻訳は創造的な営みだと言いながら、自分が言う通りに訳してくれればいい、と言った。ひねくれた受け取り方をすれば、翻訳のいちばんおいしいところは自

分が味わうから、きみには残された単純作業を依頼したい、と言っているようにも聞こえた。

だからといって、断れるはずもなかった。物問いたげな伊藤さんの顔を見ているうち、わたしの舌はひとりでに動いていた。

「お願いします。ぜひ」

レンズの向こうの目がゆるめられ、「よかった」というつぶやきが耳から心に入りこんでくる。伊藤さんを失望させなくてよかった、という安堵あんどが胸を温かくする。わたしたちのやり取りが終わるのを待っていたかのように、兄が「整」と呼んだ。

「少し話がある。廊下に出てくれるか」

兄は返事を聞く前に立ちあがっていた。伊藤さんは横目でこちらを一瞥いちべつしたが、兄に抗あいらがうでもなく素直に続いた。ふたりが出ていき、外からドアが閉じられ、部屋にはわたしだけが残された。

話って、なんなんだろう。そんなことが気になったのは数秒だけだった。自分はいま、ひとりきりで伊藤さんの部屋にいるのだという事実を認識した途端、心臓の鼓動が早まった。書物も、原稿も、湯呑も、座布団も、なにもかもが伊藤さんの私物だった。部屋の空気を深く吸いこんでみると、ほんのりと甘い匂いがした。

少しでいいから、部屋をあさってみたい。でも、伊藤さんにはべれたら浅ましい女だと思われる。葛藤かつとうで一分ほど身動きが取れなかった

が、結局は好奇心が勝った。こんなに散らかっているのだから、派手にやらなければ露見するはずがない、という確信もあった。

唾を呑むと、ぐうっ、と喉から音が鳴った。

なによりも気になるのは、座卓のあたりに散乱している原稿用紙だった。伊藤さんは、もう半年以上も新しい作品を発表していない。

お父さんのことがあつたとはいえ、間隔が空いているのが気になった。もしかしたら、とんでもない大作を準備しているのではないか。

ドアの向こうを意識しながら、畳の上の原稿用紙にそろそろと手を伸ばした。人差し指と中指で、手前にある紙を数枚つまんで引き寄せる。紙を表に向け、すばやく目を走らせる。

最初に視界に飛びこんできたのは、原稿用紙の升目を横断する大きなバツ印だった。中央で交差する二本の線は、細いペン先で何度も何度もなぞられている。その下に書いてあるのは詩らしき文章だったが、執拗になぞられた斜線と滲んだインクのせいと、ところどころ読めなくなっていた。

雪のなかへ突き刺したように、指が冷たかった。

次の一枚にも、同じくバツ印が描かれていた。紙を突き破ってしまうのではないかと思うほど強い力で、作品を否定する線が引かれていた。次も、その次も。バツ印のまがまがしさに目を奪われ、その下に書かれている作品を解読する気にはならなかった。

これはなんなのか。自問しながらも、答えはわかっていた。伊藤さんが作品を発表していないのは、多忙だけが理由ではない。おそらく、伊藤さんはいま、詩を書くことができない。

外から兄の声が聞こえた。あわてて原稿用紙を座卓の下にすべらせる。直後、ドアが開いてふたりが部屋に入ってきた。素知らぬ顔で振り返る。

「話は終わった？」

「うん。待たせたね」

兄に代わって、伊藤さんが応じてくれた。その顔にはいつもと変わらぬ穏やかな笑みが浮かんでいる。その仮面の完璧さにぞっとする。

話を済ませた兄の目には、影がさしていた。話し合いが気持ちよく終わったようには、とうてい見えない。答えのない議論だったのかもしれない。ひっそりと、伏せられた原稿用紙の端に触れた。同時にわたしは気付いた。

たまに遊びに来る程度のわたしが伊藤さんの不調に気付いたのだから、兄が知らないはずがない。それどころか、伊藤さんはみずから打ち明けたかもしれない。兄の前なら、きつと進んで仮面を脱ぐだろう。

ふたりは黙して、畳の上に座している。まるでわたしが去るのを

待っているようだ。

心なしか、伏せた伊藤さんの目は哀しげだった。この人は兄とふたりでいるとき、どんな目をしているのだろう。どんなに苛烈かれつでもいいから、できることなら、その視線の先にわたしはいたかった。

白い曇天どんてんの下、葉を落としたケヤキの横を歩いてみると、異国へ来たような気持ちになる。

十二月になっても気温が下がるばかりで、雪は降らなかった。東京で雪が降ることはめったにない、と頭ではわかっている、雪のない年の瀬はどこか落ち着かなかった。

通いなれた和田堀町への道のりを、きょうも歩く。均ならされた道に下駄の足音を鳴らし、雨垂れの残る板塀を通り過ぎ、柿の木のある家で曲がる。胸に抱いた厚手の封筒がかさかさと言を立てる。師走しわすの風は寒いが、身を切るような鋭さはない。肩にかけている格子柄こうしがらの羽織は、百田さんの奥様が譲ってくださいましたものだった。着物の上にこれを羽織っていれば、寒さは十分防げる。

玄関で下駄を脱ぎ、廊下を迷わず進んで角部屋の前に立つ。ノックは三回。

「こんにちは、ちかです。いらっしゃいますか？」

わたしがここを訪れるのは、木曜の午後と決まっている。伊藤さ

んは急な用事がない限り、在宅すると約束してくれた。この三か月、約束は一度も破られていない。

数度呼吸するくらいの間を置いて、ドアが細く開けられた。

「いらっしやい」

約束はきょうも守られた。部屋に入ると、奥側の窓ガラスにわたしの顔がうつすら映っていた。そのつもりはないのに、唇が弓型に曲がっていた。部屋はあいかわらず散らかっているけれど、わたしが通うようになったせいか、初日よりは片付いていた。

「進捗しんぱくはどうだい？」

伊藤さんは座卓の前にあぐらをかいた。わたしは勝手に座布団をその隣に動かし、ゆっくりと膝を折る。火鉢のなかでは炭が明々と光っていた。

「ちよつと難しかったです。一部、訳しきれなくて」

伊藤さんは原稿用紙の束をばらばらとめくりながら、「どれだい？」と問う。

いつものように、卓上の空いたところに封筒の中身を広げる。わたしが取り出したのは、原稿用紙の束と、〈Vanity Fair〉という英語の雑誌だった。表紙には、正装の男女が繊細な筆で描かれている。この雑誌は、伊藤さんから「アメリカ文学を知るのにちばんいい教科書だ」という一言と一緒に手渡された。

「ハクスレイという人の文章です」

「ああ……これはまた、一段と難解だね」

雑誌を開いた伊藤さんは、〈カラスと書き物机〉という奇妙なタイトルひりょうの論評に目を通しはじめた。その鼻梁の曲線やひいでた額に、わたしはつい見とれる。ほんの少し手を伸ばせば触れられる距離に、伊藤さんがいる。通いはじめたころよりは慣れたけど、いまだに緊張を押し殺すのに苦労する。

伊藤さんは真剣なまなざしを誌面にそそいでいたが、やがて「わかった」と言った。

「要は、なぜカラスが書き物机に似ているのか、という問いは根本的に無意味である、というのが筆者の主張なんだね。その他の哲学的な命題も、言ってしまうとそれと同類で意味がない。そういうわけだから、この翻訳においてはカラスや書き物机という単語の意味を追求することには、あまり意味がないんだ」

言葉は半分も耳に入っていない。いや、聞こえてはいる。けれど、頭のなかでちゃんと意味をなしてくれない。ふいに伊藤さんがこちらを振り向いた。

「ちかちゃん？」

「はい。よくわかります」

口先だけの返答に、伊藤さんは小さくうなづく。

「その理解を踏まえてちかちゃんの訳文を読んでもみると、まだ雑なところがある。たとえば、〈Riddles of the Universe〉は〈世界の謎〉とするより、〈森羅万象しんらばんしやうに対する問い〉としたほうがいいのではないかな」

わたしは「はい」と答えながら、伊藤さんの声を鼓膜こまくに記憶させようと、神経を研ぎ澄ませる。

週に一度、この時間だけは伊藤さんを独り占めできる。しかも、わたしが強引に押しかけているのではない。この個人教授は伊藤さんの提案だ。誰に遠慮えんりよする必要もなく、思う存分、伊藤さんの顔を、仕草を、声を、匂いを堪能たんのうできる。これほど贅沢ぜいたくな時間が他にあるだろうか。

翻訳の指導は一時間ほど続いた。きりのいいところで伊藤さんは「休憩」と言い、両切り煙草たばこをふかしはじめた。わたしは黙って窓を開ける。立ち上った煙が、窓の隙間から外へ逃げていった。

「昇から聞いているかもしれないけど、創刊号は来年三月売りに決まったよ」

白煙と一緒に吐き出された言葉の意味は、すぐにわかった。

伊藤さんや兄が中心となって創刊する雑誌は、〈文芸レビュー〉という誌名に決まっていた。わたしは編集補助として参加することが決まっていたものの、いまだ本格的な作業はなにひとつ与えられて

いない。それどころか、伊藤さんが口にした創刊時期についてもまったく知らされていなかった。

「そうなんですか。ちつとも知らなかった」

「やはりね。どうも昇は、ちかちゃんへの報告が後回しになりがちだ」

「わたしのことなんて仲間だと思っていないんですよ」

「違う違う。大事な妹だから、混乱させないよう、すべてが決まってから引き渡してあげたいと考えているんだろう。だとしたら、ぼくが伝えたのは余計なことかもしれないけれど」

文学の面でも生計の面でも、兄がいなければ東京での生活がままならないことはたしかだ。ただ、必要以上に子どももあつかいされている気がしてならなかった。わたしは自分の意思で文学をやることを、上京することを選んだ。伊藤さんはわたしの不快を察知しているからこそ、冗談をまぶしつつ、こっそり創刊時期を教えてくださいではないか。

ふうっ、と霧のような煙が室内に広がった。

「ぼくは、ちかちゃんの翻訳も創刊号に載せたいと思っている」

「いいんですか」

「もちろん。そのための個人教授だからね」

顔が熱くなる。やっぱり、伊藤さんだけはわたしを対等に見てく

れている。わたしは体のいい小間使いではなく、〈文芸レビュー〉の仲間なのだ。勢いに乗って、これまで訊けなかった質問が口をついて出た。

「あの。伊藤さんの作品も、同じ号に載るんですか」

返答はしばらくなかった。煙をふかした伊藤さんは、うーん、とうなって、吸殻の積もった灰皿に灰を落とした。

「ぼくは編集に専念するよ。ちょっとした翻訳くらいは載せるかも
しれないけれど」

伊藤さんの目尻が痙攣けいれんしているのを見て、反省した。調子に乗って、訊いてはいけないことを訊いてしまった。知っていたのに。あのバツ印を、わたしは目撃したのに。

東京に戻って以後、伊藤さんは詩を発表していなかった。兄にもさりげなくその話題を当ててみたけれど、まともに考えているようすはなく、「忙しいだけだろう」という答えが返ってきた。その兄もまた、長らく作品を雑誌に載せていない。

翻訳は、決して簡単な作業ではない。わたし自身、腰を据えてやってみたからこそわかる。翻訳は創造的な営みだという言葉は、事実だ。ただ、わたしが読みたいのは伊藤さんの訳文ではなく、伊藤さんの詩だった。個人的な体験や思考が色濃く伝わってくる、抒情にあふれた詩作品だ。

だがさすがに、直接問うことはできなかった。もう詩を書けないんですか、とは。

「筆名はどうする？」

だしぬけに、伊藤さんが言った。まるで創作に関する話題を避けるようだった。

「筆名、ですか」

「どちらでもいいけどね。ぼくや昇のように本名を使ってもいい」
筆名を使っている詩人はめずらしくない。たとえば、百田さんの本名は宗次そうじというそうだが、漢字を変えた宗治そうじという筆名を使っている。〈椎の木〉の中心人物である春山行夫は、姓も名も筆名らしい。

ただ、自分が筆名をつけるなんて、いままで考えたこともなかった。当てもなく畳の縁を見ながら思いを巡らせているうち、ある思い付きが頭の隅でひらめいた。

「わたし、筆名がいいです」

「なにか腹案があるのかい？」

「いえ。伊藤さんに名付けてほしいんです」

伊藤さんは、「ぼくが？」とすっとんきような声を上げた。はずみで煙草の灰がぼろりと落ちた。

「困ったな。そうくるとは思わなかった」

「お願いします。どんな名前でもいいんです」

思いきって前のめりになり、上体をすり寄せる。右肩が伊藤さんの二の腕に触れると、電流が走ったように痺れた。からだじゅうの神経が右肩に集中する。拍動が伝わってくる気がしたけど、よく考えたらそれは自分自身の拍動だった。伊藤さんはひとつも動揺を見せず、そうだなあ、などとつぶやいている。二本目の両切り煙草に火をつけ、たっぷりと煙を吸いこんだ。

「パリのセーヌ川左岸に、小さな書店がある」

虚空を見つめたまま、伊藤さんは真顔で話をはじめた。

「その書店の女性主人は、アメリカやイギリスの文学をフランス国内で熱心に紹介しているらしい。すばらしいことじゃないか。ぼくはね、ちかちゃんにも同じような存在になってほしいんだよ。世界の先端を走る文学によって、凝り固まった日本の文学を打ち破る。その役目を果たすのが〈文芸レビュー〉という雑誌であり、ちかちゃんだと思っている」

伊藤さんはまっさらな原稿用紙を卓上に広げ、ペンの先をインクに浸した。ペン先を宙に舞わせてから、まず〈左〉という字を書き、

〈川〉の字を付け足した。

「左川というのほどうだい」

「サガワチカ、ですか」

「悪くない響きだと思うけどね」

手渡された紙を、まばたきも忘れて見つめた。その姓は意外なほどすんなりと体内に入りこんでくる。長年親しんだ川崎という姓よりも、よつぽどわたしに似合っていた。いっそ、伊藤の姓をもらいうりもうれしかった。

「ありがとうございます」

「本当にいいの？」

「もちろん。ああ、でも。伊藤さんが名付けたってことは、誰にも言わないでもらえませんか。みんなには、自分で考えたって言いますから。わたしたちだけの秘密で」

「昇のぼにもっい」

間髪かんはつを容いれず「はい」と答える。当たり前だ。兄に言えば、きっと仲間内全員に知られる。伊藤さんはあまり気が進まないようだったが、最後には「まあいいか」と承諾してくれた。

初めての、ふたりだけの秘密だった。

伊藤さんはこれから来客があると言い、じきにわたしは部屋を出た。下駄を履いた足は軽く、弾はずむように歩くせいか、羽織が羽のようになびいた。このまま曇り空の向こう側まで飛んでいけそうだった。

人差し指で宙に〈左川〉と書いてみる。会ったこともない書店主を想像する。脳裏に浮かぶのは、顔を紅潮させ、はつらつとした表情で、誰も読んだことがない作品を伝道する女性だった。

広い海を漂っていたら、いずれ、わたしもセーヌ川の左岸にたどり着けるだろうか。たとえ、まともに詩を書けない女でも。

二月のなかば、中野の家をめずらしくわたし宛の書簡しよかんが届いた。家に届く郵便物の大半は、兄や同居する文学仲間へ宛てたものだったため、郵便受けの前で〈川崎愛様〉という宛名書きを見た瞬間に目を見開いた。裏面には、旭川の住所と並んで〈根上律ねがみりつ〉と記されていた。

「律ちゃん！」

つい、声に出していた。律ちゃんとは東京に来た直後に少しだけやり取りをしていたけど、すぐに途絶とだえてしまった。およそ半年ぶりに来た友達からの手紙は、予想もしていないものだった。

律ちゃんはこの春で仕事を辞めて、絵の勉強をするため東京の画塾に通うのだという。こう言ってはなんだけど、律ちゃんが教員を辞めるとは思っていなかった。二度、三度と文面に目を通すうち、体温が上昇していった。わたしは勝手な読み違いではないことを確信してから、兄の自室に駆けこんだ。兄は刊行間近の〈文芸レビュー〉の原稿を確認しているところだった。

「ねえ。根上の律ちゃんが、東京に来るって」

「ああ。そうらしいな」

けろっとした顔で応じるので、肩透かしかたすを食った気分だった。

「なんで知ってるの？」

「根上さんから、少し前に相談の手紙をもらったんだよ。春に東京へ移るかもしれないから、そのときはいろいろと面倒を見てもらえないか、という内容だった。もちろん、快諾かいだくしたけどもね」

兄は故郷から上京した仲間たちの世話役を務めている。その事實は、律ちゃんの耳にも入っていたのだろう。

「律ちゃんはわたしの友達だよ。どうして言わないの」

「友達とはいえ、本人の許しも得ず漏らすのは違うだろう。そのときは、東京へ来ることだって本決まりではなかったんだし」

そう言われると、口を閉じるしかなかった。さすがに兄だけあって、なにを言われたらわたしが困るか熟知している。

「律ちゃん、こっちで絵の勉強をするんだってよ」

「どんな画家になるか楽しみだな」

兄は横目で雑誌の原稿を見ながら、応答した。雑な返答といい、わたしとまともに対話するつもりはないようだった。

わが兄ながら、川崎昇はなかなか妹思いだと思ふ。話しかければ、よほどのことがなければ向き直って話してくれる。用心しすぎるくらいはあるけれど、わたしを大事にしてくれているのは間違いない。その兄がここまで気もそぞろであるのは、〈文芸レビュー〉の創刊が

迫っているせいだろう。どうも、原稿の集まりが思わしくなくいらしい。直接聞いたわけではないが、兄や伊藤さんの言動から察せられた。かく言うわたしも、翻訳を掲載してもらおう予定なのだが、原稿はまだ完成していない。

話が終わってもぼうつと立っているわたしに、兄は「なんだ？」と言った。

「仕事があるから、悪いけど、用が済んだなら出ていってくれないか」

「忙しいのね」

「大詰めだからな」

「そんなに忙しいなら、手伝おうか？」

年が明けても、〈文芸レビュー〉の仕事がわたしに割り振られることはなかった。

「わたし、編集補助として参加する約束だったでしょう？　なんで任せてくれないの？」

「編集をやる暇があるなら、翻訳をさっさと仕上げてください」

わたしの問いを一蹴した兄は、机に向き直り、これ見よがしに原稿に朱を入れはじめた。頼りがいのある兄だが、いったん決めたら頑固なところがある。兄にとって、わたしは幼い日と同じ虚弱きよじやくな妹なのだ。雑誌づくりにおいては戦力外だが、うるさいから編集補助

という名前だけ与えておけばいい。そんな魂胆こんたんがありありと見えた。
なにがなんでも、兄を振り向かせたかった。雲の影に覆われたか
のように、眼前がうつすら暗くなる。

「兄さんの作品は、載らないの？」

わたしは知っていた。東京に来てからというもの、兄はほとんど
作品を発表していない。知らないところで発表している可能性はあ
るけれど、それにしたって、あまりにも見かけない。兄は手を動かし
ながら「載らないね」と答えた。

「ぼくはもう少しして、落ち着いたら書くよ。他人のことより……」

「嘘。書けないんでしょう」

朱に染まった筆先が、ぴたりと止まった。兄がゆつくりとこちら
を向く。

「……なにが言いたいんだ？」

「兄さんは作品をつくれな。だから仲間の面倒きようじを見たり、雑誌の
創刊に携たづなわること、文学者としての矜持きようぢをかるうじて保っている。
忙いそしくすることで、自分はまだ文学を諦めたわけではないんだと言
い聞かせているんでしょう。違う？」

兄は黙って見返すだけだった。一度口にすると、もう止まらなか
った。

「伊藤さんも同じ。最近の伊藤さん、翻訳ばかりで新作を発表して

いない。英米文学の紹介はたしかに大事な仕事だけど、もともとそれを志していたわけではないでしょう？ わたしには、詩から逃げているとしか思えない。兄さんも伊藤さんも、雑誌の創刊を隠れ蓑に、文学と向き合うことを避けて……」

「ちか！」

びくり、と肩が震えた。怒鳴どなられたのは、記憶にある限り初めてだった。兄の白目は青白く輝いていた。首を横に振った兄が「ぼくはい」と言う。

「でも、整はぼくとは違う」

「兄さんは知ってたのね？ 伊藤さんが詩作できないこと」

「だったらなんだ。絶対、あいつの前でその話はするなよ」

「いやだ」

なぜそんな答えを返したのか、自分でもわからない。たしかなのは、腹が立っているということだけだった。兄にも、伊藤さんにも、彼らを批判しない仲間たちにも、一向に進歩がない自分自身にも。

「こんなこと、ずっとは続かない。誰かが言わないといけないなら、わたしが伊藤さんに言う」

視界が滲んできた。違う。本当に言いたいのは、こんなことではない。わたしはただ、伊藤さんに振り向いてほしいだけだ。強い言葉を使って、わたしへの関心をつなぎとめたいだけだ。怒ってもいい。殺

されてもいい。そのときわたしはようやく、伊藤さんにとっての特
別な存在になれる。

兄は額を掻き、目をそらした。鋭かった視線は憂鬱に沈んでいた。

「……ぼくは、整とちかが一緒になればいいと思っていた」

急になにを言い出すのか。思っていた、とはどういう意味なのか。

「なに、それ？」

「整に持ちかけたんだ。ちかと交際する気はないか、とね」

ざわっ、と全身の毛が逆立った。考えうる限り最悪の展開だった。

伊藤さんにわたしの本心に気付かれるのは、仕方がない。しかし他人
が伝えるのは別だ。兄はついさっき、本人の許しも得ず漏らすのは
違う、と言ったばかりではないか。同じ人とは思えない。

「なんで」

兄はあわてたのか、「誤解しないでほしい」と付け加えた。

「ちかは前から伊藤のことが気に入っていただろう？ きっと、整
もこの提案を受け入れるだろうと思っていたんだ。誰かが言っ
てやらないと、いつまでもふたりの距離が縮まりそうにないから。でも、
ぼくの目論見が甘かった。整は苦笑して、妹としか思えないから、と
……」

——ああ、やっぱり。

絶望と一緒に、そんな思いが襲ってきた。

実のところ、もしかしたら、という期待がまったくないではなかった。翻訳の個人教授をもらうようになり、ふたりきりで過ごす時間も増えた。筆名もつけてもらった。少しは特別な存在になった気がしていた。

けれどもここまでいっても、わたしは伊藤さんの想い人にはなれない。どれだけ親しくなっても、伊藤さんのなかにあるのは、血縁者に対する好意と同種の感情なんだ。いまの関係の延長線上に、恋人関係は待っていない。

大理石に触れたみたいに、背骨が冷たくなった。小石が坂道を転がるように、ころころと、涙が頬を滑り落ちていった。

あんまりだ。聞かなければ、淡い期待を持ち続けられた。しかしもう、時を戻すことはできない。兄はまだ話していた。

「整の気を引ききたいだけなら、文学から逃げるな、なんて言うのはやめておけ。ちかには悪いが、なにを言ったところで整にとってはず妹なんだ。関係に亀裂が走るだけだ。余計なことは言わず、我慢していてくれ」

「そっちは余計なことしたくせに」

毅然と言ったつもりが、涙声になってしまった。兄は「悪かった」と肩をすくめた。

「ただ、ちかには幸せになってほしいんだ」

「わたしの幸せはわたしが決める！」

悔しくて、苛立たしくて、胸を掻きむしりたかった。

兄は妹思いだ。その事実に変わりはない。ただ、妹自身がその扱いに納得しているかどうかは別の話だった。いつまでも編集に加わらせてもらえないことも、勝手に伊藤さんに交際を持ちかけることも、妹思い、の一言で片づけることはできない。

「二度と、勝手な真似しないで」

兄の戸惑^{とまじ}う顔を見たくはなかったけれど、言わずにはいられなかった。部屋を飛び出し、自室に入って鍵をかけた。思う存分泣いてやろうと思ったのに、泣けなかった。怒りのほうが勝っていたから。

ペンを手に取り、〈Vanity Fair〉の最新号を卓上に広げた。分厚い辞書を引きながら、一文節ずつ丁寧に訳していく。最大限の成果を見せつける。それがわたしなりの怒りの表明であり、兄や伊藤さんへの抗議だった。あなた方は、わたしより努力していると見えるんですか？

同時にわたしは、覚悟を決めた。このままのんびんだらりと過ごしていても、伊藤さんとの距離が縮まることは絶対にならない。ならば、どうするか？

伊藤さんの感情を揺さぶるしかない。

それはこれまで、意図的に避けていたことでもあった。他人の気

持ちをもてあそぶような悪い女は、伊藤さんに似つかわしくない。
だからこそ、文学という共通項を磨き、それによってつながろうと
した。しかしその道は、兄によって決定的に断たれた。このうえ伊藤
さんと恋仲になるには、悪い女になるしかない。

男女の機微を知悉ちしつしているわけではない。それでも、やれること
はある。

「見てろ、見てろ、見てろ……」

ペンを走らせながら唇を噛みしめる。頭のなかでは、ある会話劇
のシナリオができつつあった。

〈つづく〉